

努力の調べ 花咲く

障害を持つピアニストたちが4年に1度、その腕を競う「第3回国際障害者ピアノフェスティバル」が今月、ウイーンで開かれ、世田谷区の音楽学校生、太田将誉さん(27)が銅賞に輝いた。発達障害のため何度も練習場所を変えざるを得なかったが、得意の作曲能力を生かして栄冠を手にした。太田さんは「将来はオーケストラの曲を作りたい」と意気込んでいる。

国際障害者ピアノ「銅賞」

同フェスティバルは、日本音楽関係者が2005年、「ピアノ・パラリンピック」として横浜市で開催し、以降、4年ごとに開催されている。今月14、16日の同フェスティバルで太田さんが挑んだのは、約30人が競う課題曲の部門だった。ベートーベン作曲の「交響曲第9番(第九)」を「明るくて和風に」編曲したオリジナル曲を披露した。

世田谷の音楽学校生・太田さん

受賞が決まると、同行した姉、実穂さん(34)と抱き合って喜んだ。太田さんは「緊張したけど自分なりによくやった。本当にうれし」と笑顔で語る。受賞の知らせを聞いた母、久美子

さん(61)は「これまで孤独に頑張ってきた、ようやく花が咲いた」と、涙を流して喜んだ。

岡山市出身で、4歳で本格的なピアノ教室に通い始め、すぐその音楽の才能をのぞかせた。教師が一度に弾いた複数の旋律を聴き当てる「聴音」で、五つの音を正答し、周囲を驚かせた。作曲の宿題も家でせず、即興で弾いてみせた。

しかし、障害のため周囲とうまくコミュニケーションが取れず、結局、2年ほどで教室を辞めた。小学生になってからも、近所の教室に入っては辞め、落ち着いてピアノを学ぶことがで

きなかった。「作曲の勉強をしたい」と目指した音大は不合格に。専門学校も落ち、20歳の頃に姉がいる東京に来て、07年、世田谷区の「国立音楽院」に入學した。寮生活になじめずに数か月で休学し、両親のいる大阪へ引っ越したが、そこで開かれた「大阪府障がい者芸術コンテスト」でオリジナル曲を披露し、グランプリを獲得した。初めての大きなタイトルだった。

今は両親とともに上京し、学校でレッスンや作曲をこなす一方、楽譜の勉強にのめり込んでいる。

目標は、オーケストラの曲を作ること。フルート、ファゴット、バイオリンなど多様な楽器があり、ハードルは高いが、「ピアノ以外の作曲はほとんど経験がなく、未知の領域だけど、ぜひ作ってみたい」と話している。



銅賞のメダルをかけ、笑顔を見せる太田さん(25日、世田谷区で)＝山田正敏撮影